風雅和歌集

上之一

853
166

函號 一四

書名 二十一代集

冊數 五六

類 和歌 七八

第七十三號

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新續古今集賀

貞和二年十一月風雅集竟宴おこなはれける時

後山階右大臣

前大納言公泰

再入万葉集歌

春上九　門中六　門下二　秋上一

冬二　旅四　恋二三　恋三一　秋中二　秋下一

雑中五　雑下一　合五十七首

誤再入高

秋上一そ　續古秋下一そ　秋中　もと葉秋下二そ

きのふこそ　恋四　後撰　秋中一そ　萩のうへの

千載新上二そ　あをつゝかきつゝ　初と契二そ　わすれ

ゝ　後撰一そ　詞と二そ　千載一そ　續古今一そ　玉

葉一そ

以上合卅

九十七代光明寺浄宇貞和二年花園亭御

和歌御会ニ詠ル歌ニ　前中納言藤原公泰

右二人定家ノ末孫　禾読一処ノ人也

集中院御所ト有ハ花園亭ヲ云上ニ出ル歌ニ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新續古今集賀

貞和二年十一月風雅集竟宴和歌所
まうけとらる

後山階右内大臣

前大納言公泰

再入万葉集歌

春上九　冂中六　冂下二　秋上一
冬二　旅四　並二六　並三三　秋中二　秋下一
雜中五　雜下一　合五十七首

誤再入哥

秋上一そ　續古秋下
きのふもかふも
千載新上二そ　あそふ
ふりぬへし　後撰一そ　詞とそ　千載
葉一そ　以上合九そ

秋甲　む葉秋下二そ
花のえの
雨　後撰　秋中
哥とそ
續古々一そ　玉

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

風雅和詩集序

文和哥者氣象充塞乾坤意想範圍宇宙渾沌未判其理自存人物既生其製遂著風雲草木之赴於機感也萬彙入雅興之端思慮衰榮之變志意趣也一心為詞詠之本情性感刺改觀難波津之什者天子之聖人之風始被一朝淺者心之辞者宋也感也賢者之化已及四方情懷吾朝之元由自諧二南之餘裕若乎而世遠醜陋人趣浮華不知和訴之實義編以為好色之媒乎斟重哉

忘

巧益褒推以綺靡脂刻為事竊古語假艷詞飾而成之還時字大和風雅直述抱志不加風雅而棄以鄙俚屑俗之語質朴情理之本執不擷此而時態度而猥取之者非述作之意開情巧辞華麗之義何以加旃而專於興味為旨好之者失雅正之辞又風衆儛高古郢曲合黄鐘之情句法歌精巖易入細碎之失動直則成怒張之亂妖艷忘有懦弱之病論甚斟載不遑毛拳乃始之變

忘

乎倫意向共到者宜忘言得旨豈假筆舌

盡乎、惣而謂之不達甚源有多溺彼書流
冥、只須深志於古風、不可汲汲歩趨耶、
三代集以後得其意者僅不過數輩甚或
有昇堂不入室、況堙埋年以來於歎息有餘
為救此類風、迴温元久故事、適合風雅者歟
集而成編、天下無可與言、故溥采編自上
古至當世集而錄之命曰風雅和謌集、蓋推
握圖自推運數脫跋罫為神仙猶雖有万機
滞語詢既而得三漏多間暇剞劂復煙氛早收、
春馬渡遶華山之風霜刑厲煤茶宣抒尊

野之露衆功已興廣績方遒雖庁義而無拳
傷一物之共歌故嘆此道久廢俗流不分淫濫
以有此撰非偏探華詞顰蘂学壮一時之観也
欲挙正風雅訓学遺千載之義者也于時貞和
二年十一月九日撰之鑒縁業園記大綱云尓

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

渡邊千秋藏書

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

春哥上

春立心をよめる

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ
ふる乃山のふもとにそ春はきにける

文治六年正月女御入内の屏風の和歌

皇后宮安藝成

夫木集
九重やむめもさくらも庭ふかし
元日宴を

夫木抄
ふるき世のひかりとゝもにうるはしき
建仁元年太郎文

初春のあしたの雲
早春霞をよみ侍ける

坂上是則

山の端を出る朝日のうす雲も
初雲のこゝろをよませたまふ

伏見院御時

霞こそおもふ心地のうつるらめ
雲の内の中に宿

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

雪消氏大和の名所
と子規ふるさと
支木北六

周防内侍

城石　仲実

雑事雑四　大僧正義圓

後鳥羽院御時

前大納言為家

後嵯峨院御時

夕附日かすむ末野の人の家のかきねに雲属うく
　　従二位為家
夕雲の寒のそらさえわたるのはつるる雪もふけゆきにけり
　　前大納言為兼
雪なから寒の空ゆくひかりまてうすき山の端二入日のこりて
　　従二位為子
雪ふれはなほ白菅のうもれ井の時雨
　　常磐井入道前太政大臣
をかめこし音羽の山も今朝はなほ雪ふかきねのそ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

支木二
建久七年百九八ゝ
亦可 お中納言定家
卿のつゝらをとりかくしもて
まいりたりけるを
のつゝらとりかくしもて

（六）
梅の花をよめる
前大納言公任

（七）
宿の前をみのまにゆきて
梅の花さけるをよめる
読人しらず

（八）
我園を宿（やどイ）（りイ）とをめよ学（まいイ）
梅の花
初句
六

（五）
梅の花をよめる
前大納言公任

（六）
久保三年後宇多院の
御時
亭子院歌合に
梅の花をよめる
前大納言公任

（七）
梅の花をよめる
伏見院御製

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

拾遺集

一万十

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

百十
首のころ二条院のう
ろへい梅のひろみて
まけめ

百首歌の中に　進子内親王

ふるあけく月の新くる秋ごとに梅う香あまる初乃風

梅を契待

初の梅をよ松をく自ら千とせ

頼つ守

今こう里う家のそよ梅柳

永福門院内侍

面影う風へ折うく吹そへて梅うえ

雲の宮ゆ中ふ

春上元日

我をゆまゆゆうてむめの花乃ちるまでそらうとも

百首歌の中に　和泉式部

見不知

見うまゝうまの梅もうそめぬさもうら梅

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

春哥中

百首哥奉中

みそらより花のさそひてふる雪は
　　ゑたにとまらぬ春のしら雪

寄雪述懐

年首哥の中に柳を

法印尊円

ふるさとの春の心もしられけり
　　又降ぬまの雪の柳は

権大納言公蔭

春ふかみ風にしたがふ青柳の
　　なびくかたにや人もなるらん

百首哥奉時

春風

前大納言為世

一ふきの風やうつすらん青柳の
　　糸のみだれのなべてなきまで

関路柳

前関白左大臣

霞つる関の柳の一むらも
　　春のしるしの風ぞ吹ける

儀子内親王

吹ぬきの風も柳をもるひきて
　　うすくそみゆる春の夕暮

百首哥奉時

権大納言公蔭

春ごとの柳の糸はみだれ我
　　心のまでもなびくなるかな

左衛門督時

春ふかみ花の陰なき柳ゆゑ
　　なをたのまるる夏のかげかな

万々
うちなびくもとのこのもかのもかげ
ゆきかふ人やうらむらん
ゆきかふ人もうらむらん

春立ける日よ　前大納言為家

支木まち三
薬師の池乃流の柳ヤまを

ロ
冬野川岩波うつ雪一柳

春立ける日よ

あらく柳うつまいのうめくをうの底乃うつれゆ

春雨一向を彩て行うみ柳うつ黄揚新柳

お城濃とうつ事を　前中納言宗家

支木まち二
雪乃むらひの村ヤ柳ひ

柳をよめる　中務

家
うつの一年つくれる柳の糸いろせぬ緑なりけり

岸のうへ乃柳ハみて老ぬり芽世の春を忘ーさぬん

大江為言

百師まの太夫人乃ぬーたうつ柳いれをあねも

人丸

門五
物花ぬうつ雪氏お紅やさいうつますへ柳そうま

貴之

家

よみ人もしらず 春柳の糸

春立つ日

遠みどり柳の糸のうちそよぎ

吹くとも見えぬ春の風かな

古

摂大納言公任

春のうちは花野の草もうつろはむ

霜つく冬の末も変らず

支 文治二年百首歌合

春風よ吹きな乱りそ

散るまでの花一条

前大納言為兼

春雨の新のいとのはるばると

降りくる空を待ちぞ暮らす

権大納言家

春雨よ染みてもまれ山桜

散りなば形見ともなるべき

法印親盛

うつろはぬ物のあらばや白菊の

花も我が身も秋の盛りを

摂政太政大臣

白菊の変ぜぬ色を見るからに

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

万十候方本作

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家集云保延の頃

八重の院内侍

家

乱れ咲く花のしもこそ惜まるれ春日なりせば千代もへぬべき

康資王母

春日社にて

乱れ咲く花のしもこそ惜まるれ春日なりせば千代もへぬべき

望太后宮女房

行くとくも心ひとつを定めかね

別れ

思ふ人揚の松に契りおくあだ花ならぬ花を待てと

ありける御

返歌

思ふ人揚の松に契りおくあだ花ならぬ花を待てと

ソノノ院ノ内侍

ソノノ院ノ内侍

散末

なくしもあらず咲きそむる花とだに見ぬ春の夜ぞなき

前関白女房

なくしもあらず咲きそむる花とだに見ぬ春の夜ぞなき

朝平門院

さもあらばあれ咲きそめてひとへ散る花の心を誰か知るべき

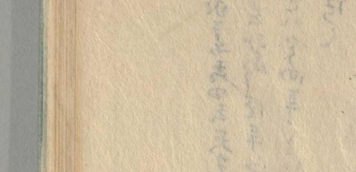
永福門院

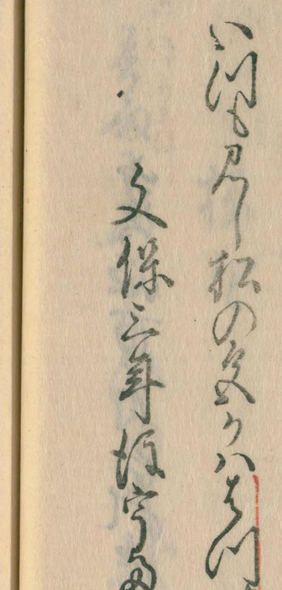
さもあらばあれ咲きそめてひとへ散る花の心を誰か知るべき

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

新古今　雅経





家集秀四云天喜三年
下云初斎院御匣殿
まいり給ふ年とそ
侍し

高光　雑名
うつゝとも又まぼろしとも
くのほとゝきすかな
なきをきゝやしつらん

乳
山桜うへそめしより春ことに
心つくしの花をみるかな

同五年内裏の
歌合に
山桜

乳
まてしはし花しちらすな山風の
たよりをたにもみるへきものを

同百首哥奉
たてまつる

山桜

権二位新家

山桜ちりなむのちをかねてしも
花のこゝろをしるへかりける

前参議教長

乳
みてすくすへきものとしもおもはねと
花ちるやとはうかりけるかな

俊頼朝臣

家集云
石上ふるさとをきてうゑをきし
しるしをみする

永福門院一條

山桜ちりなむのちをかねてしも
花のこゝろをしるへかりける

前中納言為相

家集云
いつのとしにかありけん花さかりに
山風のふきけるよのつとめて
人のもとへ
山桜のちりけるをいひやりける

永福門院
山桜ちりなむのちをかねてしも
花のこゝろをしるへかりける

中務

家
花ゆへにおもひそめてし春なれは
ちるをもあかぬ心ちこそすれ

賀之

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

後拾遺より上
係係はらず
まことにこれもちひ
なりやうやうの
ものどもなり

源道海

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

[illegible]

花ぞ散りける

[illegible]

花の雪

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ほとゝぎすみく吉野の花の雲
同会
前大納言家雅
吹ちらす嵐の音も花の雪
花山院御会
花のうへの雪のひかりそあまりける入江の鐘
徽安門院
こゝろまて霞のそこにうつりてそ春の日暮る
進子内親王
山ふかき霞の奥の花の雨そ音のみ
前大納言公明
花の色は移ろふ雨の名残にそ
法二位家
散ぬとて春の心のうつろふ月もあはれ
お大納言忠良
雪ふりて心枯のそこ寒き新玉の年の暮
坂光雅法師御会
わすれ草のこりて老の春の暮

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

春歌下

西園寺入道前太政大臣家歌合に
遍照

伊勢

春の夜のみるよ斗りと
なき物を
のこりなくちる花の
らん

第八代の集をもみる毎に
花の心ぞ昔
なりける

崇徳院御歌

ちる花をおしむ心や
まさるらん
春の夜ならぬ
ものは
なきもの

花乃歌

あちきなく春の花の
三月朔日ばかり
雪ふりたる年

源俊重朝臣

雪ふりつもるかと
見えて
花ぞ
ちりける

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

うへうられてうせもの
して
うへうす
雨のうちに花を
雨のうちふちをそれ
源師え
おくそらくてもそれ
山家花をうめ

俊見え流水奇

権中納言定頼

俊恵法師

平忠盛朝臣

弱くあれもちるや心里
屏風の絵よ猿人
家
折てふいそくらん我
ちりす

中納言家

放原え

一万廿
春くる山乃うへあらし猿
花の雪ふり中ふ

二条院参河内侍

乃う人乃おもひ
寛治百首中小夜

藻壁門院摂

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

院御哥

[illegible]

花の比ある人のもとへまかりけるに物なと
[illegible]
て次の日つかはせる

[illegible]

花の雪あすをまつ夜の[illegible]

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院御哥

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春花を

春ごとにこしの山路の山ざくら花のゆくへを風ぞ知りける

山花未落といへる事を

うみやまの福ける花やさくさかりなる花のうつろひやすき

通国法師

風ふかぬ日もなきそでぬ一枝の花の心やしづめかぬらん

前中納言定家

はるばると見渡す河の花ざくらおもかげ遠く匂ひ来にけり

大納言雅経

百首歌の中に

古

百代を

安嘉門院四条

山川をうつしとめたる水面のかげも千とせの春の色かな

儀子内親王

榊ちる山さと冬をせきかねて木の間のかげに雪ぞ積もる

九条左京大夫

吉野山のあせ乃細谷川の波の音さへ雪の朝ぼらけ

百首歌の中に

左京大夫

みふねおろすあらしのそらも知られけり雪の朝ぼらけ

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

建保四年百首御歌

春

ふるさとの山のさくらも咲そめて
　春の気色に
まきの戸あけぬ雪の朝ぼらけ

みよしのゝ山もとかすみたつたひめ
　織る錦代とや春をしまらん

春の夜の夢ばかりなる手まくらに
　かほる香ふかき梅の立枝

前大僧正慈鎮

殿富つ渡る雁
　ありあけの月

権僧正済暹

さゆる夜の月かげみがく水鳥の
　はねの霜をも払ふ池水

中務

家乃花のさかりにかすみこめて
　春とも見えぬ山の端もなし

春日野の若紫のすりごろも
　しのぶの乱れかぎり知られず

春の夜の夢路はかれぬ草まくら
　うたかた人を哀とやみん

前関白内大臣

ひとりぬるとこ山風のさむしろに
　衣かたしき今夜もやこん

前参議教長

春雨の降そめしより青柳の
　糸もみどりに成まさるらし

皇嘉門院別当

大納言公重

百首御会

順徳院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千載雑上
権中納言実宗

朗詠野草芳菲紅
錦地　錦繍限　无
草野草依人緑
新筵波集　名も
しるき小草ども
くりへり

前大納言為兼

春霞たなびく山の夕ぐれは
みのこりなく花の匂ふか

前大納言為世

雪ふかき山路の春の夕ぐれは
花のありかぞ人のしるべき

権大納言実世

花の香も雲のかけはしおりわびぬ
春の夢路の峰の通ひぢ

従二位親定

万代に惜しき道とや若木
先立つものと知らでけん

藤原教長朝臣

花の色は雲にまがへて咲きしより
幾重霞の内ぞゆかしき

後頼朝臣

三月晦日人々歌よみけるに

薄雪

うぐひすもいかに名残を惜しむらん
春のつごもる夜半の雪かな

千載集

てふてふや雲のかよひぢ吹きとぢよ
花にあかぬ春の暮かな

皇太后宮大夫俊成

古今の離れ
祝部成仲

うぐひすのさそふ山風ふきぬれば
花のこずゑぞ人まちがほなる

三月盡のこころを

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166
ガラス使用

風雅和歌集巻第四

夏奇

後京極摂政前太

古今

前中納言定家

[illegible]

連夜給郭公といふ事を

[illegible]

時鳥待夜の数はかきつめて

雲井の空に聞くぞ嬉しき

従二位為家

郭公われもこゑをたてつるに

[illegible]

藤原為春朝臣

郭公山時鳥ひとこゑの

[illegible]

鎌倉右大臣

三笠の山郭公源山出くる雨の郭公

正治二年院後鳥羽院

[illegible]

式子内親王

時鳥こゑやかすむ山のそら

夜の内の雨

権大納言公経

郭公なくやさつきのあやめ草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

千里上　俊秉

正三位季経

前中納言定家

左兵衛督朝臣

右京権大夫

従三位教長

前中納言定家

待賢門院堀川

前中納言定家

前大納言忠氏

あやめとはねさせ草のあやめ草ひくてもおなじ
なかあやめひく人もなし山ふかき
賀茂川の河邊のさつきの雨を
伊勢
前大納言經親

櫻さく頃よりあめのふりつゞきて
夏ふかき
院冷泉

あやめふく軒のしのぶもしとゞにて五月雨のみ
五月雨のころ時鳥
左京權大夫重季

五月雨の雲のたえまをしるべにて
前大納言公蔭

雲ぢより雨のあしまをたどりこし
早苗を
まこもかる前の業平
實治百首哥中
法二位家

雨中のあやめといふ題を
北泉前右兵衛督

今こりむ月をもあやめふく雨の

権中納言公雄

おもひ入山の奥にも成ぬるを世のうき事ぞ月前の法

正二位隆教

河の月前を

岸の柳枝の

寒浪百首奉

源俊平

深更月前

風よわみ波の音さへ絶はてて夜ふかき月

散位法橋勝尊

澄きよみ山の井の月前

河の月前

澄空禅師

月前の眺

藤原為家

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

文保三年後宇多院
月前多勝
鵜川を
右井河勝
弘安百首
中務宮
前大納言為氏
照射を
後深草院
権中納言
三十首御会
永福門院
前大納言實明女
水鶏を
後伏見院

まれのそらをながめくらせる月の光をさそふらく

花のえの月のそらさへみえそめてかすみもふかき春の夜の空

雨そそぐ軒のたちばなかをるなり昔の袖を思ひいづれば

百首奉りし時

春日局

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに風ふきまよふ須磨の関守

前関白右大臣

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに風ふきまよふ須磨の関守

延

後京極摂政前太政大臣

夏衣のすそふく風に月すずしもしほやくらし須磨の浦人

参三位藤親

ちちのみのちちはそのかみの月の影そや袖にやどりけるらん

仏眼院前大僧正道意

嬉しきも月をし見れば昔にもあらぬ涙ぞ袖にこぼるる

藤原隆祐朝臣

山の端のめぐりあふ夜も月の影ぞ昔にかはる秋の初風

後京極摂政前太政大臣

雲のまをもるたぐひなき月影やいかなる秋の初風ぞ

水上夜月

夜の秋をたれ思ひ出でて月影の袖にうつるとながめけん

後京極摂政前太政大臣

雲はらふ夜半の嵐の跡見えて月にしられぬ秋の初風

賀茂重保

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

夕立の風はや過て初雪の
よそ百番の合せ
清香軒流御奇
きそひの月もすでもはや
みつのあまりの宵もふけゆく
夜の程の更行
伏見流御奇
月やあらぬ昔の春ぞ恋しきと
ながめつゝあまりの宵もふけゆく
夏夜といふことを
旧里もわすれぬ夏の夜ともなれば
ほたるこそ秋のしるべなりけれ
小野小町
家
夏の夜もとゞこほりなくふくかぜは
みねさんの
吹こそ秋のしるべなりけれ

よそ百番の合せ
辞蓮法師
いつしかの野もせのみどりそよぐめり
夏の夜もふけゆくままの月
前関白左大臣基
夏月
月もなほ庭のまがきにあらはれて
池水に風もなくてくもる夏の夜
順流法師
雲かかる山陰の夕風ふけゆけば
後一条入道前実左大臣

寛治百首奉れる時

春立つ心をよめる　伊勢

ふりすてゝ雪ぞ行くめる吉野山
　古里人は春を知れとや

寛治二年後度百首奉れる時

春風と吹くや氷のとけめより
　波の花さへ咲きぞ初むる

霞

春日野は煙立つらし若草の
　妻もこもれり我も籠もれり

遠仁四年百首歌の中より

山深み春とも知らぬ松の戸を
　たゝく音は風の花

後度百首歌

片敷袖

冬百首奉れる時

雪ふかき山の麓の道絶えて
　人音せぬに年の暮れぬる

寛治百首奉れる時

山の端の月影さえて更けぬらし
　百首歌奉りし時

冬月

冴ゆる夜の月の光を見るからに
　我山ふかみ里遠しとも

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

夏おそくいでしを
風そよぎ杜の梢よ吹れいでしその
蝉を　　進士阿親王
雨そそぎて窓吹そよ春ふかみ蝉のなく
なの雨かな　　二条治親王
雲ぢ行く物よ蝉ハおもそ
西前大納言
蝉のおと風よみだれて吹そよぐ
夕暮て物ぞ悲き秋の風　　式部大輔明親王
夏ごろも新ら月の雨そそぐ
後柏原院御宇

後奈良院新宰相
なく蝉をよそのみ
蔭原澄信朝臣
鳴そめてひぐらしやそまちもる蝉のこゑ
細流を　　佐見院新宰相
なく蝉のおやむともなく風の
藤原為秀朝臣
夕附日消ゆくなく蝉のそのかげに今そすゞしき
建仁二年新撰六帖歌合
雨そそぐやどの風ふかなく蝉のおとをみてもひとり

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

853
166

3228

国立国会図書館　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『二十一代集 400巻』 請求記号 853-166

ガラス使用